

## 諸外国のFDネットワーク

宮田政徳

(徳島大学大学開放実践センター)

### 1. FDネットワークの使命・目的

**【POD】 (=Professional and Organizational Development Network in Higher Education)** は、米国で1975年に創設された学会である。その目的は、①会員に対して、出版・大会・コンサルテーション・ネットワークを通して、サービスと支援を提供すること、②会員以外にもFDに関心のある人にサービスと情報を提供すること、③国内高等教育機関のリーダーたちに職能開発・教授法開発・組織開発の重要性を唱導する役割を果たすことである。

**【SEDA】 (=Staff and Educational Development Association)** は、英国で1993年に創設された学会である。その目的は、①会員が高等教育及び教育組織の改革、改善を主導的に実施する能力を高めることを支援すること、②会員が大学教員の教育力を高めたり、教授法と学生の学びの理論を教育現場で応用することを支援すること、③会員が学生の学習経験の質を高める取組を支援することである。

**【HERDSA】 (=Higher Education Research and Development Association of Australasia)** は、豪州とニュージーランド及び近辺諸島で1972年に設立された学会である。その目的は、①高等教育の向上、高等教育研究、高等教育政策を支援すること、②会員の職能開発に貢献すること、③高等教育の教授・学習の開発を促し普及させること、④高等教育における顕著な貢献を認め、表彰すること、⑤高等教育の問題を議論するためにフォーラムを開催すること、⑥HERDSAと他のFDネットワークとの協力を促進することである。

**【STLHE】 (=Society for Teaching and Learning in Higher Education)** は、カナダで1981年に創設された学会である。その目的は、①高等教育における教授・学習と教授の学識(Scholarship of Teaching)、教授法開発、教育政策を普及・向上

させること、②会員の職能開発に貢献すること、③高等教育における優秀な教育や顕著な教育的リーダーシップを表彰すること、④高等教育における教授・学習の情報交換のためにフォーラムを開催すること、⑤STLHEと他のFDネットワークとの連携協力を促進することである。

以上四つのネットワークに共通する目的は、教員の職能開発、教授法開発、組織開発である。その他の共通点は必ずしも全部のネットワークの目的に明記はされていないが、優秀教育や教員を表彰することである。やや異なる点は、HERDSAとSTLHEは明確に他のネットワークとの連携を目指していることである。また年次大会開催についてはSEDAは明確に目的として掲げていないが、その代わり学生の学習経験の質に力点をおいているので、英国の高等教育が「学習者中心教育」を目指していることが分かる。

### 2. FDネットワークの年次大会

**【POD】** 1976年より大会が開催され、2010年の11月には第35回大会がSt. Louisで開かれている。会期は4日間のプログラムで、大会前Workshop、基調講演、口頭発表(75分)とポスター発表があり、それらの内容は主に次の3分野に関するものである。①教員個人の能力開発：教員のキャリア形成に関するもの、②教授・学習の開発：大学での教授法に関するもの、③教育組織開発：FDセンターをはじめ教育組織に関するものである。上記の発表は、さらに2つの形式のセッションに分かれて行われる。①Concurrent Session：各室に分かれて様々な話題について口頭発表者と参加者間の討論が行われるもの、②Roundtable Session：各室に分かれて様々な話題について、話題提供者と参加者間の討論が行われるものである。①と②の違いは、②がよりインフォーマルで、くだけた雰囲気の中で自由な討論が行われるもので

ある。参加者は全米のFDセンターで職能開発を担当している Developer が中心である。参加者数は2008年のReno大会ではアメリカを中心とし、カナダ、英国、中国、韓国、日本からの参加者を合わせて約600名であった。

【SEDA】1996年より大会が開催され、2010年の11月には第15回大会がChesterで開かれている。会期は2日間のプログラムで、基調講演とParallel Sessionによる口頭発表(45分)のみである。内容はPODと同様に主に次の3分野、①教員個人の能力開発、②教授・学習法の開発、③教育組織開発に関するものである。口頭発表は、内容によって二つのタイプに分かれている。①Discussion Paper: 口頭発表に対して発表者と参加者間で討論が行われるもの、②Workshop: 話題提供者の話題について参加者がグループを作りグループ内で討論が行われ、後に全体会で情報共有するものである。参加者は全英のFDセンターで職能開発を担当している Developer が中心である。参加者数は2009年のBirmingham大会では英国を中心に約80名ほどで、外国からは日本(主にSPOD)からの15名のみであった。

【HERDSA】1977年より大会が開催され、2010年の6月には第33回大会がMelbourneで開かれている。会期は4日間のプログラムで、大会前Workshop、基調講演、口頭発表とポスター発表があり、内容は他のネットワークと同様の3分野に関するものである。ただ教授・学習法の開発に関しては、遠隔教育のためのe-learningの発表の数が多ことから、広大な国土である豪州ではe-learningが必要不可欠になっているのが分かる。口頭発表はConcurrent Sessionsで行われ、他のネットワークと異なる点は、発表が3種あることである。①Full Research Paperはレフリーの審査を通過した正式な研究論文発表(40分)、②Concise Research Paperはレフリーの審査を受けていない研究論文発表(20分)、③Showcase Abstractはレフリーの審査をうけていない研究論文中間発表(20分)である。参加者はFDセンターで職能開発を担当している Developer が中心である。参加者数は2009年のDarwin大会は豪州とニュージ

ーランドを中心に約400名で、外国からは米国、カナダ、英国、中国、韓国、日本からの参加があった。

【STLHE】1982年より大会が開催され、2010年の6月には第30回大会がTrontoで開かれている。会期は4日間のプログラムで、大会前ワークショップ、基調講演、Concurrent SessionとRoundtable Sessionによる口頭発表(50分)とポスター発表があり、内容は他のネットワークと同様のものがある。参加者はカナダの大学のFDセンターで職能開発を担当している Developer が中心である。参加者数は2010年のToronto大会ではカナダから573名で、外国からは米国、英国、ニュージーランドをはじめ、中国、韓国、日本も含め40名の参加があった。

筆者が参加した年次大会の特徴をまとめると、【POD】では、基調講演が2、Concurrent Sessionでの口頭発表が138、Roundtable Sessionが34、Pre-Conference WSが22、ポスター発表が36である。参加者数、Pre-Conference WS数、ポスター数とも最大級である。

【SEDA】では、基調講演が3、Parallel Sessionによる口頭発表が30である。参加者数、口頭発表とも最小であるが、Parallel Session 30の中に11のWorkshop形式を取り入れ、参加者同士が交流するようにしているので、毎年お互い顔見知りが集まるような家族的雰囲気がある。

【HERDSA】では基調講演が3、Concurrent Sessionでの口頭発表が161、Pre-Conference WSが10、ポスター発表が16である。Concurrent Sessionでの口頭発表が最大であるのは、前述したように、発表時間が40分の正式な研究論文発表と20分の中間発表的な論文発表があるためである。こうすることによって若手の研究者が発表する機会を提供しているように思われる。

【STLHE】では基調講演が2、Concurrent Sessionでの口頭発表が147、Roundtableが20、Pre-Conference WSが12、ポスター発表が33である。カナダだけでこれだけの数の参加者、口頭発表、Pre-Conference WS、ポスター発表があるのはFDに熱心な国柄が伺い知れる。